

特集

OCTで見る緑内障

序 論

富田剛司*

今月の特集は「OCTで見る緑内障」である。眼底疾患の診断にOCT(光干渉断層計)は欠くことのできない診断機器になったと思われるが、緑内障診断においても例外ではない。ただ、現在緑内障診断で主に利用されているOCT画像は、乳頭周囲の網膜神経線維層の検出であると思われる。しかしながら最近のOCTはあらゆる角度から緑内障を分析できるようになってきている。今回の特集は、OCTがどこまで緑内障に迫ることができているかを紹介する目的で企画された。日常臨床への応用という点に関してまだ研究途上のものもある。かなり最新の知見も入っており、今後の日常診療にすぐに役立つものではないかもしれないが、これから緑内障を研究していこうと考えている若い先生方には是非読んでいただきたい内容ともなっている。

緑内障に関する最近のOCTのトピックスは、前眼部の観察にOCTが利用されるようになってきたことである。特に前眼部OCTによる隅角解析は、隅角鏡で名人(?)が判断していたものが(もちろん、今でも隅角鏡観察は非常に大事だが)、OCTにより定量的に観察できるようになり、経時変化の検出に大変有用になってきた。このあたりのことについては、長年隅角の研究を続けてこられた神戸アイセンターの吉水先生と栗本先生が詳細に解説されている。さらに前眼部のOCT観察で特記すべきことは、偏光OCTやOCT angiography(OCTA)を用いて緑内障手術後の濾

過胞の機能評価が可能になってきた点である。濾過胞がしっかり出来ているように見えても眼圧が高い症例もある。このような時に濾過胞がどうなっているのかを解析するのに今後重要なツールになりそうである。このOCTを用いた濾過胞評価については東北大の津田先生、OCTAによる評価については京都大の木戸先生と赤木先生に最新の知見を交えて解説いただいた。一方で、緑内障の眼底所見では、最近は篩状板の解析がホットな話題となっている。深部強調画像法(EDI)や深部到達性の高いスウェプトソースOCTを用いることによって検眼鏡や眼底写真では観察ができなかった篩状板の断面像を見ることができるようになり、緑内障性乳頭変化の知見が大きく広がってきている。篩状板解析に関するわが国のトップランナーである澤田先生が詳しく解説されている。緑内障はなぜ乳頭陥凹の拡大が起きるのかという、わかっているようでわからないこの未知の領域にメスが入りはじめている。一方、緑内障における黄斑部の神経線維層変化については、従来のOCTにも緑内障に対する黄斑部解析プログラムが搭載されているが、近視眼では正常であっても神経線維層が薄いこともあり、緑内障診断への応用には注意を要する面もある。黄斑部構造で最も特徴的なことは上下対称という点である。ここに注目すれば、視神経乳頭形状にかかわらず黄斑部の構造変化から緑内障の有無の判断ができる点に関し、板谷先生がわかりやすく解説されている。この項に関しては、明日からの診療に是非役立てていただきたいと筆者は思っている。

*Goji TOMITA 済安堂井上眼科病院(東京都千代田区)